

人よ！聞いてくれ。君の中の水よ！火よ！ 灰よ！灰の中の骨よ！灰よ！<sup>(\*)</sup>

人は知っているのだろうか、私達の「生」が 川の流れてたゆたう小さな木の葉のような存在でしかなく、流れがゆるやかな時は良いが、日々の暮らしの為ではなく、ある避け難いもの、「権力」とか「経済」とか「技術革新」とかあるいは人々が「進歩」と呼ぶもの、のために、もはや自分の存在を流れの外に在る事も、変更をも許さない程に勢いを増した時の ある「喪失」の事を。

人は感じているのだろうか、その喪失の中で 人はただ上辺だけの体験を繰り返しているに過ぎず、それもそのつどあつと言つ間に忘れて行く、そしてもはや誰も あの穏やかな親しさを持って 自分の時間の中に生き、自分の傍らに息づいていたものたちを 顧みようともしない 時代遅れさ！ そのことを見て取った時の「悲しみ」の事を。

距離や時間はそれだけで存在する。それぞれの物語がある。<sup>(#)</sup>

社会の構造が変われば人の生活も変わる。そしてその変化の中で もはや必要の無くなったもの 役目を終えたものは消えて行くしかない。しかし そうだろうか。

あの星はいつでもあつたのだ。

草も物語のようにそこで育つのだ。

「作品は 自分の内側から否応もなく 生まれ出てくるものよ。私を見て！」と叫んでみたところで 何になるだろう。「私」もまた自分の属する社会の一部、点のようなものである事を 拒絶する事は出来ない。

何故なら 人はそれでも生きて行かなくてはならないから。人の「生」が上辺の体験と忘却の繰り返しの中にある時、美術もまた そのようなものである事に、そもそも自分の内側から生まれ出たと思っているものも、自分の内面と 思っているものも、実は 社会の反映に過ぎないのかもしれない という事に 何故 鋭敏である筈の創造的精神が 思い至らないのか。何故 耳を澄まそうとしないのか。

声は聞くべきではないか。無用と思われる声でも。脳がいかに下水道や学校の壁やアスファルトや 福祉事業で詰まっていようと虫の羽音も入れるべきではないか。

我々の目に、耳に、おらかな夢の一端が見えて、聞こえて、良いではないか。

私は物語の事を思う。忘れてしまった物語。むかしむかしの物語。

ある言葉を選べば なぜそれが選ばれたのか 言葉につながる物語を説明しなくてはならない。それが人間の責任だ。言葉の背後に潜む物語を明らかにして その言葉が使われた、意味を 間違わないように伝えなくてはならない。

私は人間の責任を果たす事が出来るだろうか。

母よ！・母よ！ 空気はこんなにも軽く顔にそよいでいる。微笑めばいつそう澄んでいる。

\* アンドレイ・タルコフスキー監督作品  
「ノスタルジア」より狂人ドメニコの演説

C I N E V I V A N T N O 4 一九八四年

# レスリー・M・シルコウ著「儀式」より、

講談社文芸文庫 一九九八年